
メガネ美人は才媛だけど淫靡

檀敬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メガネ美人は才媛だけど淫靡

【Nコード】

N5183BA

【作者名】

檀 敬

【あらすじ】

メガネ美人についての私論。どんな風に、どれだけ、どのくらい、メガネ美人が好きなのかを自分勝手に語っているだけですが、よろしければ読んでやってくださいませ。

(前書き)

沢木香穂里さんのお題「メガネ美人」をお借りして、今回は小説ではなくエッセイを書いてみました。

メガネを掛けている彼女は比較的美人に見えるものだ。

え、比較的って？

そう、比較的美人なのだ。

どついう意味なのかって？

まあ、慌てないで。

ここからは「メガネ美人は才媛だけど淫靡」という私論を展開しようという嗜好だから。

僕の身勝手なメガネ美人論を落ち着いて読んでいただこうではないか。

比較的美人と言ったのは少なくとも二つの顔を持っていて、それを僕らに比較させているから。

メガネを掛けている顔と、メガネを掛けた顔と、その二つの顔。ドラマや小説、特にアニメなどは顕著だと思う。

同じキャラクターなのに、メガネ一つで雰囲気が変わってしまったていることを。

そういう風に描いているという身も蓋も無いが、そう言い切れるものでもないだろう。

メガネは、簡単に言ってしまうと『変身道具』だと思うのだ。

もちろん医療用具としての意味もあるのだが、それはそれ。

メガネを掛ける。

メガネを掛けない。

ただソレだけのことだが、それは日常と非日常と言ってもいい程の違いがあり、その差は絶大だ。

メガネを掛けている姿を知っている者にとっては、メガネを掛けない姿が非日常。

メガネを掛けていない姿を知っている者にとっては、メガネを掛けている姿が非日常。

表裏一体。

そして、その変身ぶりに「はっ！」とさせられるというシーンは日常にあふれている。

それ故に、何となく空恐ろしい。

その魅力の罫にはまっていくのが。

……あ、あくまで私論ですけど。

そして、彼女がメガネをたくさん持っていたらそれだけたくさんの顔を持つことになる。

只でさえ美人で、只でさえ二つの顔を持つ彼女が、更にたくさんの顔を持つなんて！

それだけ魅力を引き出すのだ、彼女の魅力をメガネが！

そうして僕らは、彼女にメロメロになってしまふのだ。

どんな風にメロメロになるのか、以下の詩的文章にて堪能していただく。

メガネをしている彼女がこちらに振り向く。

メガネをそつと下にずらして、悪戯っぽく僕を見る。

彼女は「うふ」と笑った。

その口元に見惚れている僕。

そんな僕を差し置いて、彼女はメガネのフレームに手を掛ける。

メガネを外すと同時に頭を振って、髪の毛を後に振り払う。

僕はなびく髪をつぶさに目で追う。

そして僕の視線はメガネを外した彼女のつぶらな瞳に吸い寄せられた。

ニヤリと微笑んだ彼女の顔がそこにあった。

僕はいつもこんな風にやられっ放しなのである。

アಂತが勝手にやられているだけだろうって？

いやいや、そんなことは無いだろう。

こんな風に「メガネ美人」という言葉に反応しない男性はいないはずだ。

「メガネ美人」に限りないノスタルジーまで感じる男性は少ないかもしれないが。

少なくとも僕は、そのノスタルジーを感じる一人だと自負している。

そんなことを自負する必要があることなのかどうかはまた、別の問題かもしれないが。

……なんか負けてるな、俺。

あくまで私論、私論。

ネットの中でも、そんな「メガネ美人、大好き」な方々が多いよ
うだ。

ググってみると「メガネ美人」がたくさん出てくる。

やはり筆頭は「時東あみ」ですかねえ。

そして「真鍋かをり」でしょうか。

僕的には「滝川クリステル」のメガネっ娘姿も堪らないと感じる
のだが。

そして「小西真奈美」とか「上野樹里」なんかもゾクゾクする。

ちよつと大人の「本上まなみ」や「鶴田真由」なんかも……。

おやおや？

ちよつと話が脱線したかな。

私論ですから、お構いなく。

先程出てきた「メガネっ娘」という言葉も「メガネ美人」と共に
世の中に存在する。

これはここ十数年の間に出来た言葉であり「萌」の要素の一つが「メガネっ娘」だとされている。

このことは今までメガネを掛けねばならなかった女性をどれだけ勇気付けたかは計り知れない。

どんな女性かという点、ドジっ子だったり、偏執狂だったり、秀才肌だったり。

言ってみれば脇役的なキャラクターの女性だったからだ。

そんなメガネを掛けた女性が、主役となって「舞台のセンター位置」を占める価値を得たのだ。

だが、このことを意識している「メガネっ娘」はどのくらい居るというのだろうか。

ある意味で「美人の要素」と成り得た『メガネ』という存在。

この「メガネ」にどんな魅力があるというのだろうか。

僕はこの「メガネ」には二つの要素があると考えている。

それは「インテリジェンス」と「エロス」だ。

僕はメガネを掛けた女性には知性を感じることが多い。

これは言うまでもないことだろう。

あのヨン様がメガネを掛けているのは、知的に見えるからだと言っているほどだから。

もっとも何でもメガネを掛ければ、誰でも知的に見える訳ではない部分もある。

僕の場合は、いろんな条件を付加してのことだ多いのだが。

知的なメガネ美人となると、やっぱりバリバリのキャリアウーマンを最初に挙げねばなるまい。

白いシャツに黒か紺のタイトスカートを穿いてオフィスフロアを颯爽と歩く。

デスクではアンニュイなポーズでパソコンを操作し書類にサイン

をする。

グレーのスーツに身を固めて、会議室の壁面に映し出されたデータをレーザーポインタで指し示す。

その彼女の鼻の上にはいつも知的好奇心いっぱい妖しく光るメガネが乗っかっている。

そして、彼女たちの笑いは実に知的で、大笑いなんかは絶対にしないのだ。

大笑いしたら、知的に掛けられたメガネがずれちゃうもん。

『仕事の出来る女』というキャッチフレーズがシツクリと収まる。

そんなイメージがメガネを掛けた女性に付きまとう。

……と僕は思っているのだが、そう思っているのは僕だけかもしれない。

だけど、それがメガネが持つ「インテリジェンス」だと僕は思うのだ。

しかしながら、申し訳ないが僕のイメージの中に色の薄い茶髪での「メガネ美人」は有り得てない。

やっぱり黒髪だ、黒髪。

許容範囲は栗色の髪まで。

重みが足りない、重みが。

メガネが浮いちゃう。

ただし、彫の深い顔の造りと金髪の外国人は別枠である。

ずい分勝手な言い草だなんて？

ええ、分かってますよ。

あくまでも「私論」ですから。

その癖、髪の長さやヘアスタイルには無頓着である。

ショートカット。

前下がりのショートボブ。

肩まで伸びたサラサラヘアのセミロング。

大きくウェーブしたロングヘア。

何でもいらつしやい状態だ。

メガネはヘアスタイルにこだわらないのだ。

ええ、私論ですから。

そんなスタイルの話と密接な関連があるのが、もう一つの要素である「エロス」だ。

さて、お楽しみ「エロス」とは何か。

それは、先程の「インテリジェンス」とは表裏一体のことだと思っ
っている。

インテリジェンスでビジネスライクな雰囲気のエロスの要素は無いはずだ。

だが、そこはかの「メガネ美人」だ。

一瞬、ドキッとさせられることがあるのだ。

男性諸氏には、恐らく経験がお有りだと思う。

仕事の話をしているのに、なぜか視線があちらやこちらへと走ってしまうのを。

彼女の視線や口元、そして胸の開いたシャツやタイトなスカートに。

そんな「視線走査」をするのは、彼女の視線がそうさせるのだ。

彼女を直視出来なくなるから。

メガネのレンズを通した彼女の視線。

メガネがずれた時に覗く彼女の視線。

それが僕らをそう駆り立てる。

仕事の話とは無縁だからこそ「エロス」を感じるのだ。

無償で崇高なエロス。

一瞬にしてどうしようもなく感じてしまう男の性^{さが}。

それはその女性をメガネをしているから。
僕はそう思っていたのだ。

ひとたび、メガネを掛けた女性自身がエロスを発動すれば、メガネはたちまちエロスの化身となる。

そのことについては、男性諸氏は良くご存知のことだろうと思う。

ふと感じる色気や艶はほんの少し前、その瞬間まで感じていなかった。

なのに、メガネ顔で覗き込まれた時、つい目のやり場に困って下を向いた時。

彼女の白いシャツが、いつもよりボタン一つ余計に外れていた。
そのシャツの奥に見えた、深い胸の谷間。

状況も考えず、思わず生唾を飲み込んだことを。

……あ、これはメガネと全然関係なかったね。
はっははは。

あくまで私論ですよ、私論。

そして「自分の恋人がメガネを掛けていたら」というシチュエーションを考えてみる。

やはり「キスをする時」ですよね、メガネが小道具として一番輝くのは。

メガネを掛けた彼女の、そのレンズの奥の瞳が妖しく微笑む。

自分の恋人なのに、もう手に入れているのに、なんでこんなにドキドキするのと思う一瞬。

思わず彼女の腰に手を回し、知らず知らずのうちに彼女を抱き寄せたり。

このメガネという小道具を上手に使うその瞬間を心得ている女性
は違うよなって。

幻想かもしれないけれど、そんなことを考えてしまうのだ。

彼女は俯いてから、おもむろに両手をメガネのテンプルに当てがった。

そして、顔を上げるのに合わせてメガネを顔からそっと引き離す。メガネのモダンに引っかけた一緒に動いた髪の毛が、彼女の頬に後れ毛のようになった。

そして、彼女は半円になった瞳で僕を見据えて、小さな声でこう言った。

「キスして」

僕は、おずおずと彼女のウエストに腕を回した。

……なんちゃって。

うふ。

えへへ。

おほほ。

……あ、こほん。

ええ、私論ですよ、もちろん。

そして最近知った事実から類推したことがある。

それは「女性はそのことを踏まえて行動している」「らしいことを。

実にしたたかである。

力技で数を打てば当たるだろうというオスに対して、確実な戦略で狙った獲物を落とすメス。

そんな構図が見え隠れする。

考えてみれば至極、道理なんですよ。

オオカミはオスだけじゃないんですよね。

オオカミにもちゃんとメスもいる訳で。

だから、オオカミな男もいるけれどもオオカミな女性もいるんだよね。

その手口は男の方法論よりも実にストラテジックであると。

そのストラテジীরの一つとして「メガネ」がある。

そう結論付けたい。

あくまで「私論」ですが。

メガネを掛けた女性には十分な注意を払ってください。
そして、喰っちゃってくださいませ。

意外と「喰われちゃってる」かもよん。
喰われちゃってもいいか、相手はメガネ美人なんだもん。

うふ。

(後書き)

お読みいただきまして、誠にありがとうございます。

実に自分勝手な語り草で申し訳ありません。

僕の中では理路整然としてフムフムと思いつつながら書いたつもりですが。(ホントか?)

楽しんでいただけたのなら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5183ba/>

メガネ美人は才媛だけど淫靡

2012年1月14日12時57分発行